



# 南方雜感

政経部長 大森吉五郎

## ◇ ニュース

北ボルネオの一部に立寄つたとき當日朝發行された「同盟通信」の第一便を兵隊さんの一人に手渡したところ「こんなお土産が一番有難いですよ」と言つて大變喜ばれたのは思はず眼頭が熱くなつた。熱帯地特有のほのぼのとした朝のたゞずまひもなく、黄昏の詩情もなく、たゞいきなり明けて唐突に暮れ行く暑いばかりの、その日その日の生活は、花に慣れ、月を賞でる日本人には初めのうちには確かに淋しい。僻地の護りについてある兵隊さんが四季のない氣候に慣れ、私等の所謂南方ばかりにだん／＼なつて行くとき、その救ひとなり、刺戟となるものは、内地の「ニュース」だ。同盟の現地の

## 經濟通信會議開催

決議第二年を迎へてわが國産業

經濟界に對する推進力としての同盟經濟通信の重要性を再確認し、併せて我が社の財政基礎確立の一礎石としての使命達成を協議するため二月二十五、二十六の兩日にわたり大阪支社において社長臨席の下に六大都市ならびに株式取引所關係支社局長參集、經濟會議を開催した。會議は連日熱心なる討議に終始し多大の成果を収めたが討議を通じて特に強調されたのは左の諸點であつた。

- 一、編輯部面
- (イ) 産業別通信の一層の充實
- (ロ) 南方關係經濟「ニュース」の強化

地「ニュース」だ。

私自身が兵隊として暮らしたときの經驗で想像するのだけれど、この北ボルネオの兵隊さんでも或はまた曾てジャバの山の峠で會つた兵隊さんでも、また北セレスのコスモスの咲いてゐた山地で語つた兵隊さんでも、そのとき齎された内地の「ニュース」を機縁として丁度お盆や正月に知らぬうちに過ぎ去つた過去を想ひ起すと同じやうに戦地で過ぎた幾月幾歳の出来事をふと想起し、或は郷里を想ひ、記憶の整理を行ひ、現實の自分の姿を、自分の使命をしみ／＼と思つたのではないだらうか

何時の世にも人の思念を培ひ、情操を動かし、行動を律するものは「ニュース」だ。同盟の現地の

決議第二年を迎へてわが國産業經濟界に對する推進力としての同盟經濟通信の重要性を再確認し、併せて我が社の財政基礎確立の一礎石としての使命達成を協議するため二月二十五、二十六の兩日にわたり大阪支社において社長臨席の下に六大都市ならびに株式取引所關係支社局長參集、經濟會議を開催した。會議は連日熱心なる討議に終始し多大の成果を収めたが討議を通じて特に強調されたのは左の諸點であつた。

總支社局が凡ゆる犠牲を拂つて炎熱と闘ひながら、東京本社から二十四時間、間斷なく送られてゐる電信同報を受信して發行してゐる「ニュース」はいふまでもなく現地作戦軍或は軍政當局の重要な基礎資料であり、南方に挺身する邦人指導者の心の糧であり、或はまた現地原住民の教化宣傳の素材であり、對敵宣傳の彈でもある。

## ◇ 敢闘精神

同盟の社員は文字通り現在只今深刻に展開されてゐる思想戦の戦闘員である。現地作戦軍が私等に要請してゐることもこの戦闘員としての敢闘精神である。第一線背後において私が直接的に知り得たシンガポール攻略戦において、或はまた傳へ聞くビルマ作戦、バスマン、コレヒドール作戦において從軍した同盟の諸君は、文字通り死線を幾度か越し、兵隊さんと全く同じく凡ゆる勞苦を嘗めた。現

達成に邁進することを申合せた。會議出席者 (本社側) 社長、秘書、塚本總務局長、石部經濟局長、稻本局次長、板垣内經部長、瀧口亞經外經部長、福井通信部長、青木業務部長、松本業務主任、山本發送部長、根津參事、村田解説部長、田中整理部長 (支社局側) 結束大阪支社長、小寺經濟部長 其他關係各部長、主任 横濱支局長、名古屋支社長、經濟部長、業務主任、京都支局長 神戸支局長、業務主任、金澤支局長(代理)、廣島支局長、關門支社長、福岡支社長、長崎支局長、福岡南方總局長、豊田中支總局勤務社員、山崎京城支社長

## ◇ 書籍

南方にあつて一番淋しいことは本がなかく手に入らぬことだ。私の昨年二月十日の日記を見ると「中央公論一冊来る。何となく心が豊かになつたやうな気がする」と記してゐる。新聞、雜誌でさへ所によつては容易に届かないのだから、新刊書などは手にするのはなかく難しい。東京の生活のやうに毎日知識人の誰彼と會つて話をする機会が豊富ならその寂寥感はまだ少いだらうが、その機会も少く、内地との距離的隔絶感はいよいよ心の虚しさをかこちたくなる。

既に同盟南方圖書館の議さへあるさうだから今後は現地社員この方面の希望は漸次充足されるであらうが、この問題は單に同盟社員だけの問題ではない。南方へ挺身してゐる日本人はその一人々々が文字通り指導的立場の人であり推進力でなければならぬのだから、その心を養ひ思想統一をするためには書物に關する限り内地に居住すると同じ程度にまで供給の道を講じたものである。もちろんこのことは夙に關係方面で努力されてゐることではあるが、私達

## ◇ 現地住民

南方の民族對策は重要な問題の一つであらう。このことをここで皮相な觀念論や淺薄な見聞で議論する意思はないが、たゞ私達の身近なところから、ほんたうの協力體制を形造ることを念願としたい現地同盟支社局にも何處へ行つても現地人が多數働いてゐる。運轉手、ボーイの外に、タイピストもをれば、無電技手もをり、記者もゐる。私が旅行でみた限りではどこでも實によく働いてゐる。同盟で働くことの喜びと誇りとを語る現地の人達と一緒に酒を汲んだこともあるが、東洋人の彼等は、何といつても私達に一番近い感情を持つてゐる。そして一般に南方人は怠惰であり、智力が低いやうにいへられてゐるが一概にさうもいへないと思ふ。このことは別のところへも感想を書いたので重複を避けるが、要するに彼等は苛烈な自然的な條件の外に生活の理想を奪はれてゐたため、或は勤勉の美德が害はれ、向上の精神が缺けたところがあつたかも知れない。しかし既に失はれた理想は日本が新しく植多つゝある。

富に感つて貰ひたいと思ふ。理由は前記の通り現地の邦人が南方建設の選士としての役割を持つ今日内地、外地を繋ぐ思想統一、戦争完遂への一億一心は「ニュース」の網によつて東京も現地も同じものでありたいと願ふからである。

## ◇ 南方大學

これは古野社長の言葉を真似たのだけれど最近讀んだ英國植民史の中に「英本國の政治を、動脈硬化に陥らんとする官僚を常に若返らせ、革新に導いたものは實に植民地の政治であり、その若い官吏であつた」旨を讀んで非常に共感した。滿洲建國に協力し、創成期の辛苦を嘗めた人達が日本の革新の推進力であつたと同じやうに、現在南方の軍政に日夜心を打込

は彼等に理想を植ゑ、新しい環境を與へねばならぬ。現地住民が蒙昧であつたり、怠惰であつたりするまゝに放置されてはならない。私等日本人は、凡ゆる指導を惜みなく與へ、そしてまた常に彼等より一步進んだ教養と理想を持たねばならないと思ふ。そのことが東亞の盟主としての日本人に課せられた使命であらう。素朴な表現をすれば現地住民に對し愛を持ちたいといふのが筆者の言分である。

# 辭 令

本社回狀第十五號、第十六號第十七號による。但し終より約五十名は回狀發表を略さる

通信局勤務社員 高橋 榮一  
(國通交換社員)  
編輯局整理部長を命ず(二月二十八日附)

漢口支局長 小松 利一  
西貢支社長を命ず

西貢支局長事務取扱 篠原 滋  
西貢支局長事務取扱を解く  
編輯局勤務を命ず

編輯局政經部長 猪伏 清  
マカッサル支社長を命ず

企畫局航空部次長 元治郎  
長兼マカッサル支社長事務取扱  
支社長事務取扱

マカッサル支社長事務取扱兼務を解く(二月四日附、各通)

編輯局速報部長 小寺 巖  
大阪支社長を命ず(二月五日附)

兼昭南支局長 福田 一  
南方總局長兼昭南支社長を命ず

バタバヤ支局長 市川 太郎  
ジャカルタ支社長を命ず

福岡支社長を命ず  
小椋 留吉  
クチン支局長を命ず

通信局大陸部長 八木 久  
バリックバン支局長を命ず

岡山支局長を命ず  
黒崎 信由  
(松江通信部駐在)

アンボン支局長を命ず  
通信局勤務社員 田中 眞清  
バンジェルマン支局長を命ず

(二月十日附、各通)

大阪支社長を命ず  
豊田 治助  
中支總局勤務を命ず(二月五日附)

京城支社長 淺野 豊  
通信局地方部長を命ず

總務局庶務部長 山崎 義人  
京城支社長を命ず

編輯局政經 川添 邦彦  
部地方主任

編輯局整理 高村 利世  
部校正主任

青森支局長を命ず  
廈門支局長 二瓶 邦雄

富山支局長を命ず  
北支總局勤務社員 河瀬 守二  
金澤支局長を命ず

名古屋支局長 荒井宗次郎  
通信部長

長野支局長を命ず  
滿洲國通信 社勤務社員 小林 德賢  
廣島支局長を命ず

鹿兒島支局長 伊牟田重雄  
宮崎支局長を命ず

京城支社長を命ず  
小倉 彰  
釜山支局長を命ず

大阪支社長 横地 倫平  
編輯局局長を命ず

大阪支社長編輯部長を命ず  
有光 晴一  
大阪支社長編輯部長を命ず

通信局地 日笠多賀之助  
大阪支社長通信部長を命ず

名古屋支社長 古田 二郎  
勤務社員

名古屋支社長通信部長を命ず  
福岡支社長勤務社員 東野 正雄  
福岡支社長通信部長を命ず

大阪支社長編輯部長 久保田清松  
天津支局長を命ず

福井支局長を命ず  
福井 誠正  
石門支局長を命ず

大阪支社長通信部長 近藤 公一  
關貢支社長を命ず

富山支局長 樋口徳治郎  
石門支局長 渡邊 銜  
總務局勤務を命ず(各通)

函館支局長 瀨川伊和男  
廣島支局長 周藤 清  
釜山支局長 磯部彌太郎

編輯局勤務を命ず(各通)  
青森支局長 蒲田 基  
通信局勤務を命ず

長野支局長 中住 繁夫  
金澤支局長 酒井 井平  
事務取扱

金澤支局長事務取扱を解く  
北支總局長 佐々木健兒  
天津支局長

中支總局長 岩本 清  
漢口支局長兼務を命ず  
關貢支局長 高雄 辰馬

編輯局勤務を命ず  
(二月四日附、各通)  
海外局情報部次長 皆藤 幸藏  
マニラ支社長を命ず

南方總局長を命ず  
牛勝 五郎  
橫濱支局長を命ず

臺北支社長勤務社員 岩本 愿  
廈門支局長を命ず

札幌支社長勤務社員 山口 重藏  
釧路支局長を命ず

マニラ支社長(國 通交換社員) 高見 達夫  
滿洲國通信社(歸還のため解任)

橫濱支局長 小野勝三郎  
編輯局勤務を命ず

編輯局勤務社員 大場 健次  
北支總局長を命ず

北支總局長寫眞部長 相澤 義信  
部攝影主任

中支總局長 稻津巳喜二  
眞部主任

中支總局長寫眞部長 荒川 穆  
南方總局長寫眞部長を命ず

南方總局長寫眞部長 高崎 修  
編輯局勤務社員 知久 義雄  
大阪支社長勤務社員 眞名垣嘉雄

大阪支社長勤務主任を命ず  
(二月廿四日附、各通)

聯務局勤務社員 上野 茂  
靜岡支局長を命ず

靜岡支局長主任 一ノ瀬 博  
總務局勤務を命ず

(二月十九日附、各通)  
福岡支社長勤務社員 矢野 元  
福岡支社長庶務會計主任を命ず(二月廿三日附)

經濟局勤務社員 古川 貞市  
中支總局勤務を命ず(二月十二日附)

編輯局勤務社員 鈴木 章一  
マカッサル支社長勤務を命ず(二月十五日附)

十五日附)  
大阪支社長勤務社員 伊藤 米子  
北支總局勤務を命ず

總務局勤務社員 栗栖 平造  
社員試用

聯務局勤務を命ず  
(二月十六日附各通)  
神戸支局長勤務社員 山富藏之介  
大阪支社長勤務を命ず

大阪支社長勤務社員 茨木 定徳  
神戸支局長勤務を命ず

編輯局勤務社員 貞吉 武夫  
經濟局勤務を命ず

總務局勤務社員 下條 徹男  
昭南支局長勤務を命ず

(二月十八日附、各通)  
天津支局長勤務社員 大塚 勇吉  
經濟局勤務を命ず

編輯局勤務社員 宮城 春生  
北支總局長勤務を命ず

神戸支局長内信主任 片岡 誠一  
大阪支社長勤務を命ず

大阪支社長勤務社員 越智 利惠  
神戸支局長勤務を命ず

廣島支局長勤務社員 前原 忠重  
吳通信部駐在を命ず

(二月十九日附、各通)  
福岡支社長勤務社員 日下部武徳  
總務局勤務を命ず(二月廿一日附)

中支總局勤務社員 長富 一郎  
同

南方總局長勤務を命ず(各通)  
名古屋支局長 奥野常次郎  
勤務社員

岐阜通信部駐在を命ず  
(二月廿三日附、各通)

大阪支社長勤務社員 山田 正之  
編輯局勤務を命ず

大阪支社長勤務社員 悟道 照夫  
編輯局勤務を命ず

編輯局勤務社員 被川 親茂  
昭南支社長勤務を命ず

海外局勤務社員 太田 誠  
マニラ支社長勤務を命ず

岡山支局長勤務社員 井上 肇  
松江通信部駐在を命ず

(二月廿四日附、各通)  
京都支局長 船戸 光雄  
務社員試用

京都支局長囑託 西村 幸男  
山形支局長 務社員試用 中村 光代

福岡支社長 務社員試用 山岸 嘉子  
聯務局勤務社員 久保田久男

關門支社長 務社員試用 本田 武光  
臺北支社長勤務 長 武男

大阪支社長勤務 佐藤キヨ子  
准社員試用 同

社員を命ず(三月一日附、各通)  
大澤 次郎  
南京支局長事務を囑託す(十七年十二月七日附)

朝見 伸夫  
京都支局長事務を囑託す(二月一日附)

黒木 重雄  
宮崎支局長事務を囑託す(二月九日附)

水谷三重三  
編輯局の事務を囑託す(二月十三日附)

小川 寅市  
聯務局の事務を囑託す(二月十五日附)

寺本 正敏  
北支總局勤務社員 休職を命ず(二月廿一日附)

休職を命ず(二月廿一日附)  
總務局經理部長 成田 周  
休職を命ず(二月廿一日附)

旭川支局長勤務社員 竹森 素子  
職員規程第十九條第二號に依り休職を命ず(二月一日附)

桑原 景男  
中支總局勤務社員 職を命ず(二月廿八日附)

榎谷徳太郎  
經濟局勤務社員 職員規程第廿三條第四號及第廿四條に依り認責す(二月十九日附)

荒田政次郎  
聯務局勤務社員 死亡(二月四日)

百井 信二  
仙臺支局長勤務社員 死亡(二月五日)

鈴木 藤夫  
海州支局長勤務社員 死亡(二月廿一日)

牛窪 剛  
橫濱支局長勤務社員 務准社員

豐原支局長勤務社員 小林 篤司  
依願解職(二月廿一日附、各通)

大阪支社長勤務主任 丸岡 辰雄  
聯務局勤務社員 唐木 ゆき

依願解職(二月十二日附、各通)  
大阪支社長勤務社員 石井トヲ

同准社員 米倉 節子  
橫濱支局長 黒田サキ子

中支總局勤務 西原 曉江  
務准社員 依願解職(二月十五日附、各通)

出版部だより

企畫院研究會著  
大東亞建設の基本綱領  
A 5判 定價二圓八十錢

高瀬 太郎著  
ナチス戦時株式統制  
B 6判 定價八十錢

山崎 早市著  
機械工業の基礎知識  
B 6判 定價八十錢

六郎著  
醫 術 と 醫 道  
B 6判 定價二十錢

濱田久米夫著  
モ ン ロ ー 主 義  
B 6判 定價二十錢

昭和十八年版  
同 盟 時 事 年 鑑  
B 5判 定價三圓

以上新刊及び増刷できました。  
同 盟 時 事 月 報  
B 5判 定價一圓五十錢

「同盟旬報」の改題、毎月十四日發行。  
同 盟 世 界 週 報  
B 5判 每號約六十八頁

「國際經濟週報」を四月三日より改題發行の豫定。



【一月分】 結婚

澤村三樹郎 經濟局
白砂妙子 同
小林篤司 豐原支局
中宮博 札幌支社
竹俣一男 金澤支局
佐々木明 關門支社
西岡正一 企畫局
坂井義房 通信局
波多江孝 編輯局
淺井義雄 編輯局
山崎早市 經濟局
廣岡賀津 同
川上十郎 神戶支局
五十嵐元次郎 編輯局

△出生

長尾義男(大阪支社)長
內野福治(長崎支局)四
丹藤雄(名古屋支社)二
不動健治(總務局)同
大瀧鹿次(臺南支局)二
野津榮(大阪支社)長
西井武好(同)同

同盟講習所生徒募集

四月の新學期を控へて同盟講習所では左記要項によつて昭和十八年度生徒募集を行ふ。

一、豫科一年

入學資格 國民學校高等科卒業又は青年學校普通科卒業
入學考查 人物考查、身體検査
豫科二年補缺 若干名

一、豫科二年補缺

入學資格 豫科一年修了程度
一、本科(電信科、速記科) 各五〇名

入學資格

中學四年終了程度
入學考查 作文、口頭試問

△申込締切

四月九日

△入學考查

四月十一日

△操業開始

四月十五日

△應召、入替

上木鐵之進 編輯局
藤井千尋 臺北支社
梶川博 名古屋支社
角田秀雄 京都支局
加來啓次郎 佐賀同
岩崎靜雄 經濟局
濱本光三 釜山支局
春木作市 平壤同
吉田正男 京城支社
石井廣吉 同
合志廣吉 同
水口清 大阪同

△見舞

田中三之助(總務局)夫人病氣
松本茂(横濱支局)病氣
高尾まさ子(編輯局)同
角谷佐一(小樽支局)長女病氣
倉澤德治(長野同)病氣
伊賀德次(神戸同)夫人病氣

對流圖

戰場から 米英を驅逐せよ 名古屋支社 不二夫

二月十六日衆議院において奥村情報局長は報道通信の指導監督に關する確固たる進むべき方針を闡明されたが、今更ながら吾人の重大任務を痛感し身の引き締るを覺えたのである。

受持つ使用文字の取扱について 案外無頓着な例が多い。 無論漢字制限とか、寸秒を争ふ通信といふ諸條件を考慮に入れねばならぬが表現文字の社會的心理的影響を考ふる時は慎重にせねばならぬことを痛切に感するのである一例を挙げれば英國、米國なる文字に就て最近某雜誌に抹殺すべしといふ小論が掲載されてゐたが、小生ももつともな説論だと首肯されたのである。かかる觀方が社會の一面に瀾漫してゐるとすれば考慮を要する問題ではないかと考察されると、米國の米の字を検討して見ると、米はおこめであり、五穀を意味するときく。畏くも 大御神には「吾カ高天原ニ齋庭ノ穂ヲ

以テ亦吾カ兒ニ御セマツル」と御神勅あらせられ給うたのである。瑞穂の國、五穀豐穰の國は吾が國より他に絶對にない。その神聖なる米の字をまつるはぬ國アメリカの國名表現に充てるのは如何か。又英國の英の字であるが、英はひいでるであり、秀であり、麗しである。英靈、英雄の英である。斯様に我が國として聖なる文字を敵國アメリカ、イギリスから抹殺すべきではないか、といつて小生にも名案はない。ここに於て何か、彼等敵國相當の漢字がなきもか、諸士の御高見を伺ひたい。 本欄原稿を募る。六百字以内 毎月未締切(係)

昭和十七年度 互助會收支精算 昭和十七年12月31日現在

Table with columns for Income (収入) and Expenses (支出), detailing financial transactions for the Mutual Aid Association in 1928. Includes sub-sections for 'Retirees' (△退社) and 'Debit' (△市慰).

編輯 厚生部の肝煎りでの頃 品類の配給があり、本社 員は何となく生活が豊かになつた やうな嬉しい氣持ちである。この 上誰でも第一に要求するやうな ものを特配して呉れば大いに 助かるわけだが、戦時下である。 無理に餘力を作り出してでも奉仕 報恩を心懸くべきで、自己中心の 欲求は最低限に制すべきだらう。 産報結成式は何故か宣傳が不徹 底で當日会場に入るまで不安な氣 持ちを抱かされたが、取越し苦勞 には無用、超満員の盛況であつた。 しかも出席者は實に行儀よく開會 を待ち、社長の挨拶や來賓の祝辭 を傾聴した。社員の時局認識はこ んなところまで明瞭に發露し、 青少年をも、壯年男子をも一枚に 緊張せしめるのであつた。(武)